

遠い国からきたサンサ

宇佐見興子◆作

宇野亜喜良◆絵



作●宇佐見興子

岡山県に生まれる。早稲田大学法学部卒業。第12期児童文学学校卒業。故安藤美紀夫氏に師事。「ジャングルジム」同人。作品に「チュー助大江戸事件帳」がある。横浜市在住。

絵●宇野亜喜良

1934年、愛知県に生まれる。日宣美展特選、日宣美会員賞、東京イラストレーターズ・クラブ賞、講談社出版文化賞さし絵賞等を受賞。絵本に「あのこ」「二杯目のスープ」、さし絵に「あいつの影ぼうし」「黒猫ジルバ」「私の彼氏」など多数ある。東京都在住。

NDC913

宇佐見興子

遠い国からきたサンサ

宇佐見興子作 宇野亜喜良絵

国土社 1990

139 P 22cm (新創作ボックス2)

遠い国からきたサンサ (新創作ボックス2)

1990年10月30日 初版1刷発行

著者 宇佐見興子

発行者 鈴木正明

発行所 株式会社 国土社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

☎03 (943)3721(営業) (943)8054(編集)

印刷所 株式会社 厚徳社

©宇佐見興子／宇野亜喜良

装丁／山本利一

Printed in Japan

ISBN4-337-14602-4 C8391

遠い国からきたサンサ

宇佐見興子◆作

宇野亜喜良◆絵



もくじ

1
マリオ……………5

2
暗い海……………45



3 パバイの首……………89

4 アスタ・ラ・ビスタ

……………121

視線・まなざし……………139



1、マリオ

「でっけえ屋敷^{やしき}だな」

おれが、思わずつぶやくと、

「だろ。隆^{たかし}、おどろくのはまだはやい。中が、またいちだんと」

運転席の柴田^{しばた}さんが、自分の家みたいにいる。

「なにしろ、セニョール・ゴンザレス、ときたら……」

「さ、いそいで。時間だ」

うしろの席で、おれのおやじがせかした。

「六時までには、まだたっぷりありますよ」

「約束^{やくそく}の十分前には、着くもんだ」

おやじ、あいかわらずだな……



柴田^{しばた}さんは、助手席のおれに片目^{かため}をつむり、車からでた。門のわきのボタンをおす。

一、二分待つて、鉄のとびらが音もなく左右に開き、同時に、はるか前方の玄関^{げんかん}に、黒い制服^{せいふく}すがたの男がひとりでてきて、こつちを見た。

車は、玄関前の池のほとりをゆつくりとまわつて、ポーチに近づいていく。

青銅^{せいどう}のライオンの口から高くいきおいよくあがる噴水^{ふんすい}、うつそうとしげった背^せの高い、葉のばかでかい木ぎ、咲^さきみだれる原色の花。空を指さす、投げる、走る、寝^ねそべる、とさまざまなポーズをした等身大の石像^{せきざう}が、木ぎの間に五体、かげのように立っている。

目の前の建物^{たてもの}だけ夕陽^{ゆうひ}をあびて、二階のガラス窓^{まど}が、まっ赤にそまっていた。

ここは、南米ペルーの首都リマ市の郊外^{こうがい}、黄金博物館^{おうごんはくぶつかん}の近くだ。

この家の主人、セニョール・ゴンザレスは、おれのおやじがつとめている、ある大手電機^{おおてでん}メーカーの、取引先の会社社長で、今夜は、ミニパーティーに招待^{しょうたい}してくれたのだ。

制服の男がさつと近より、スペイン語でなにかいって、うしろのドアをうやうやしくあけた。おやじがおり、つぎに、ピンクのドレスの、おやじの新しい奥^{おく}さんがおりる。

車の中に充滿^{じゅうまん}していた香水^{かうすい}のにおいが、外に流れでた。

おれは、自分でドアをあけ、おもいつきり、きれいな空気をすった。

「失礼のないように、な」

おやじのひとことで、七五三の祝い以来のネクタイが、ますますおれの首をしめつける。
一月七日、夏。暑くてたまらない。今、日本は、冬のまっさかりだというのに。地球をぐるりとまわって、日本の反対側にきていることになる。

「マリオが待つてゐるわ」

香水が、おれの耳もとで強烈きやうれつにおつた。

マリオ……。

そいつが、これから会う、この屋敷やしきのひとり息子むすこだつた。

「息子だつて。娘むすめのまぢがいじやないの」

「あれが女に見えるか。……見えるかも……」

柴田しばたさんは、おもしろがつて、おれとそいつを見くらべた。

そいつは、美少年びしょうねんのあらゆる条件じょうけんを体じゅうにちりばめて、二階から広間に通じる階段かいだんの上に登場した。

背せは、おれより五センチほど低い。一六三センチぐらいかな。黒いタキシードがあう。

肩^{かた}はばがせまく、きゃしゃな体つき、肌^{はだ}が、すきとおるほど白い。

小さくて赤いくちびる、やわらかに波打つ肩までの金髪^{きんぱつ}、ほそい指がそれをかきあげる。南国のはげしい陽^ひざしや油ぎった料理、マリアツチとかメレンゲとかのそうぞうしい音楽、陽気なスペイン語のおしゃべりなどは、どう見ても、そいつからは想像^{そうぞう}できない。

「おぼっちゃまどうし、せいぜいなかよくな」

柴田^{しばた}さんが冷やかす。

「趣味^{しゅみ}じゃねえよ」

今夜の客は、五組の夫婦^{ふうふ}と、おやじの部下で独身^{どくしん}の柴田さん、子どもは、おれとそいつのふたりきりだ。

そいつはなにもいわず、こつちをちらりと見た。長いまつげが、青い瞳^{ひとみ}をふちどっている。

おれの心は、ざわついた。

「知ってたら、こなかったのに」

いつか見た映画^{えいが}のセリフが口をついた。

「テーブルは、おぼっちゃまふたりならんでどうぞ、だって」

柴田^{しばた}さんが、スペイン語をおれに通訳^{つうやく}してにやついた。

さつきから、おやじの新しい奥^{おく}さんが、ちらちらとこっちを見ている。

見せ物じゃない、ってんだ。いつ、どんなふうに友だちになるのか、気になるんだろ。いかげんにしろよな、まったく！

もう一か所から、視線^{しせん}がとどく。これは、マリオの母。広間の入り口で紹介^{しょうかい}されたとき、おれは、ひと目で好き^すになった。やさしいまなざしが、おれをくるんだ。その人が、おれを見つめている。

期待にそえないけど、こんな女つばいやつとどんな話が合うって言うの……。

息子^{むすこ}とそっくりな美しい人の視線を、おれはむりしてはねかえした。

目の前のごちそうに、専念^{せんねん}するしかないな……腹^{はら}をきめる。

大きくて重そうな、きらめくシャンデリアが、おれの脳天^{のうてん}にいまにも落ちてきそうだ。

そいつが最初^{さいしょ}に声をかけてきたのは、豪勢^{ごうせい}な夕食会がおわり、スローな音楽が流れはじめたときだった。

「日本語で、『わたし』というのは、なんというのか」

とつぜん、ものすごいなまりの、スペイン語みたいな英語えいごできくから、一・五秒ほどおいて、

「オ・レ、っていうのさ」

と、英語で答えてやった。二歳さいのときから小学三年生まで、カナダとアメリカの三つの町に住んでいたから、それほど英語にはこまらない。

「わたし」というのは、英語では「アイ」で、日本語なら「わたし」または「ぼく」。
でも、いま、おれは、「オレ」なのだ。

そのわけは……まあ、他人に話したって、しかたのないことだけど。

「オ・レ……」

そいつは、何度もうりかえし、

「スペイン語では『ジョ』。この国では『ヨ』ともいうよ」

と、いがいに人なつこい目をした。

ちよつと待ってくれよな……そつちも、最後さいごまで話さない気でいたんだろ。だから、というわけじゃないけど、せつかくいままで無関心むかんしんなふりをして、ようやく立ちあがったところだぜ。デザートのブドウを一ふさ左手にもつてるのも、時間かせぎのつもりだったん



だ。それを……。

「年は、いくつだ」

そいつは、また英語で文法どおりにきく。そういえば、この国の人たちは英語が苦手のようだ。市場でも道をたずねるときでも、英語がなかなか通じなかった。マリオも例外ではないらしい。

「十三歳」

できるだけぶつきらばうにこたえと、そいつは、ふつとわらって、ひとさし指で自分の胸をつつき、うなずいた。

今夜のパーティーに、とくべつ子どものおれが招かれたのも、そいつと同じ年だからだ。「友だちになったのか」

おやじが、アルコールで赤らんだ顔をくずしながらよってきた。

「そんなんでも、ないけどな」

ほそつとこたえる。

「ほんとによかったこと。ペルー最後の夜に、こんなにすてきなお友だちができて」

おやじのうしろから、おやじの新しい奥さんが顔をのぞかせ、おれの肩に手をおこうと

した。

おれは、その手をはらい、いよいよ大粒のおおつぶのブドウの皮をむくのと리카かった。いつもなら、ぽんと口に皮ごとほうりこむのだけど。

目のはじめに、マリオが、じつとこつちをうかがっているのがわかる。

マリオの母がよつてきて、息子の肩をそつとだいた。なにごとかささやき、おれの方を見て、にこつとわらう。

「ぼくの部屋へいかないか」

マリオがいった。

「そうさせてもらえ」

「すてきなこと」

おやじたちの期待にみちた声。いつも、これだ。

「どうぞ。ね、どうぞ」

やさしい声が、マリオのうしろでいった。

おれは、思わずうなずく。

女の人たちの香水、強烈な葉巻のにおい。にぎやかなおしゃべり、グラスのふれる音。

テーブルの上のどくどくしいほど赤い花をあとにして、おれとマリオは階段をのぼっていく。

マリオが、うしろをふりかえった。視線がとまる。

マリオの母の背に手をやり、客と話している長身のわかくてハンサムな男。口ひげをたくわえ、うすく色のついた眼鏡をかけ、高価そうな背広と腕時計、金のブレスレットまでして、自信にあふれている。客のだけれど、彼に氣にいられようとしていた。

男がふと目をあげ、階段を見た。

「マリオ！」

さけんで、手をひらひらとさせる。

広間みんなが、マリオを見あげた。

マリオは、それにこたえて、ちよつと手をあげると、背をむけ、階段をのぼりきった。肩のところに、やけに力がはいっている。小さく舌うちして、

「はいれよ」

あごを、しゃくつた。

おれの部屋の四倍はある。

白い清潔せいけつそうなレースのカーテン、ばかでない本棚ほんだな、窓ぎわの机つくえ、白いレザーのソファ、ブルーのベッドカバー、おっと、日本製にほんせいのステレオだ。おやじの会社のもの……かな。
「ハード・ロック、好きか」

「ああ」

マリオは、一枚まいレコードをとりだした。エレキの音が、部屋をゆるがせはじめる。ラジオの深夜放送で聞きなれた曲。

おれは、ちよつぴりマリオを見なおしはじめている。

マリオは、にやつとわらうと、ドアのところにいき、廊下ろうかの外をうかがった。

「オッケー」

かぎをかけ、おれのけげんそうな顔を見て、また、にやつとわらった。

「かけろ」

ソファアを指さす。

おれは、ちよつと緊張きんちやうして腰こしをおろした。

マリオは、上着をぬいで、ベッドにほうり投げた。蝶ネクタイちやうをはずし、シャツのそで